

## 文学の政治

文学の政治とは、作家たちによる政治のことではない。作家たちが当時の政治的ないし社会的な闘争に個人としてどのように参加したのかアンガジユマンに関わるものではない。それはまた、作家たちが著作の中で、諸々の社会構造や政治運動、さまざまなアイデンティティをどのようなかたちで描いたかに関わるものでもない。「文学の政治」という表現が含意しているのは、文学は文学として政治を行う、ということである。その前提は、作家たちは政治を行うべきか、それとも、みずからの芸術の純粋性に身を捧げるべきか、と問う必要などはなく、この純粋性それ自身が政治と関わりを持つ、という点にある。集団的実践の特殊な形態としての政治と書く芸術という限定された実践としての文学との間には、本質的な結びつきが存在する、ということが前提されているのである。

問題をこのように立てるには、それを構成する用語を明確にしておく必要がある。まず政治に関する点から簡単に述べることにしたい。政治はよく、権力の実践および権力をめぐる闘争と混同される。しかし、

政治が存在するためには、権力が存在するだけでは十分ではない。また、集團的生活を規制する法が存在するだけでも十分ではない。それには共同体がある特殊な形態でかたち作られる必要がある。政治とは、ある特殊な經驗領域を構成すること、つまり、そこではいくつかの事物が共有のものとして、一定数の主体がそれらの事物を指し示したり、それらについて議論することができるとみなされている、ひとつの特殊な經驗領域を構成することである。しかし、こうした構成は、人間学的な不変要素に基づいて固定的に与えられるものではない。政治が依拠する所与とはつねに係争的なものである。アリストテレスの有名な定式が述べているように、人間は正と不正を分かちあうことを可能にする言葉を持つので政治的存在だが、動物は快ないし苦を表す声を持つだけである。だが根本的な問題は、何が「人間的な」熟慮の言葉であり、何が「動物的な」不快の表現であるのかを判断しうるのは誰なのかを知ることである。ある意味で、政治的活動とはすべて、何が言葉で何が叫びであるのかを決定する鬭争であり、したがって、政治的な能力を証明する感覺可能な境界線を引き直す鬭争である。プラトンの『国家』は冒頭から次のように説明している。職人たちは自分の仕事以外のことをする時間がない。彼らの活動や時間の用い方、そうしたものに自分を適合させる能力のせいで、彼らは政治的活動が作り出すあの補足的な領域に近づくことができない。だが、政治が始まるのはまさにこうした不可能性が問い直されるとき、自分の仕事以外のことをする時間を持たない人々が、持たないはずの時間を割いて、自分が公共の世界に参加する話す存在にほかならず、凶暴な、あるいは、苦しんでいる動物などではないことを証明するときなのである。このように空間と時間、場所とアイデンティティ、言葉と雑音、見えるものと見えないものを分配し再分配すること、これこ

そが私が感性的なものの分割パルターージュ分配三と呼ぶものをなす。政治的活動によつて感性的なものの分割パルターージュ分配三のあり方はかたちを変えざる。公共の舞台上に新たな対象と主体が導入され、見えなかつたものが見えるようになり、騒々しい動物としてしか聞かれていなかつた者たちが話す存在として耳を傾けられるようになる。したがつて、「文学の政治」という表現が含意するのは、文学は文学として、こうした空間と時間、見えるものと見えないもの、言葉と雑音の切り分けに介入する、ということである。諸々の実践と、可視性の諸形態と語りの諸状態の間に存在する関係が、ひとつないし複数の公共世界を切り分けるのだが、文学はこの関係のあり方に介入するのである。

それでは「文学としての文学」が意味しているものとは何か、いまやこの点を知る必要がある。「文学[literature]」とは、言葉と文字エクリチュールの芸術による生産物の総体を示す歴史超越的な用語ではない。この語が、今日では凡庸化した(「いわゆる文学という」意味を持つようになったのはかなり最近のことである。ヨーロッパ世界において、この語が文人たちの学識という古い意味を失い、書く芸術それ自体を指し示すようになったのは、一九世紀のことにすぎない。一八〇〇年に刊行されたスタール夫人の著作『社会的諸制度との関係において考察された文学について』四は、こうした新しい用法のマニフェストと考えられることが多い。とはいへ、批評家の多くは名前が変わつただけであるかのように議論を進めてしまい、そのため歴史的に画定された諸々の出来事と政治的潮流との間に関係をうち立てよう、文学という永遠不変の概念を確立しようとしてしまふ。五他の批評家たちは、文学という概念の歴史性を考慮に入れようとはした。だが、ほとんどの場合、それはモダニズム的パラダイムの枠組みの中で行われた。かつては模倣二再

現「representation」のため、芸術は外部の指示対象を表現する手段と化していた。ここで言うモダニズムのパラダイムによるなら、芸術上のモダニティとは、各々の芸術がこうした模倣<sup>II</sup>再現への隷従と袂を分かつことであり、その固有の物質性に集中することとして規定される。したがって、文学的モダニティは、言語をコミュニケーションのためにではなく、反対に、自動詞的に「それ自体として」用いることとして捉えられる。だがこれは、政治と文学の関係を確定するにはきわめて問題含みの基準であつて、すぐにジレンマに陥つてしまう。すなわち、文学的言語の自律性に対して、文学を道具として用いるような政治的利用を対置するか、あるいは、文学的自動詞性とはシニフィアンの唯物論的優位を肯定することだと考えて、それは革命実践の唯物論的合理性と堅く結びつくものであると權威主義的に断言するか、そのどちらかに陥つてしまうのである。『文学とは何か』の中でサルトルは、詩的自動詞性と文学的他動詞性とを対立させながら、一種の示談による取り決めに提案した。いわく、詩人たちは語を物のように用いる。「無疵な魂などどこにしよう」と書いたとき、ランボーは明らかに問いを発したのではなく、文を、あのティントレットの黄色い空にも似た不透明な物質に変じたのだ<sup>1</sup>。したがって、詩による政治参加<sup>アンガジュマン</sup>について語ることは無意味である。これに対して、作家たちが関わるのは意味である。彼らは語をコミュニケーションの道具として用い、そのことによつて、望もうが望ままいが、公共の世界を作るといふ使命に対して政治参加<sup>アンガジュマン</sup>することになる、というのである。

不幸なことに、この示談による取り決めは問題を何も解決しない。サルトルは文学的散文による政治参加<sup>アンガジュマン</sup>をその言語の用い方に根拠づけた直後に、何故フローベールのような作家たちが散文的言語の透